

マンドリンアンサンブル『カシオペア』 きままなコンサート

本井 理

総評

マンドリンアンサンブル『カシオペア』は家庭の主婦が構成する女性合奏団であるが、普段の活動はイベントなどでの演奏披露が主体で、コンサートホールを借りての演奏会は2001（平成13）年6月24日（「2001年ハートフルコンサート」）以来となる。

前回のプログラムをみると出演者は指揮者も含めて30名で、そのうち20名が今回の演奏会にも出演している。今回の出演者（指揮者を含めパーカッションと司会の賛助2名を除く）は31名であるが、御主人の転勤や子供の進学といった事情を考慮すると、5年経過で継続出演64.5%というのは非常に高い定着率だといえよう。それだけ居心地がよく、まとまりのよい団体だと推察される。

筆者としては、主婦や老人が「身内の楽しみ」を目的に集っている合奏団について論評するのはなじまないし、酷でもあるので避けたいと考えてきた。特に子育てを抱えている主婦は練習に集まるだけでも相当な苦勞があり、練習時間を確保しやすい学生団体と比較してハンデを負っている事情も十分に理解しているつもりである。

しかし、マンドリンアンサンブル『カシオペア』については、例外である。なぜなら、指揮を務める堂腰慶子氏は「北海道学園札幌音楽専門学院」（札幌市中央区）のマンドリン科助教授であり、音楽の世界で公職にあるプロフェッショナルであるからだ。プロが合奏を指導し、楽曲構築を行なう以上、演奏結果については奏者個々人の錬度や事情に関わらず、すべて指導者の責任となる。もちろん「ここでは個人的に趣味でやっているので大目に見て下さい」などといった言い訳など一切通用しない。

以下、内容について述べるが、悪い意味で典型的な「マンドリン・ギター弾き」の演奏であり、結論からいうと音楽として評価し得る演奏は1曲もなかった。楽しんで弾くことを目的に参加していた一般のメンバーの方々には酷評で申し訳ないが、本レポートは感性も知識もないのに安易に（自称）プロになってしまうマンドリン関係者に対する警鐘であり、マンドリン・ギター合奏の世界であろうとなかろうと「公職に就く」「肩書きを名乗る」ということが、いかに重いものであるかを認識していただければ幸いである。

夏の思い出 (中田 喜直／編曲者氏名記載なし＝必ず入れよう！＝)

第1部の前半2曲の指揮は、今野悦子さん。原曲はいうまでもなく歌唱曲であり、主旋の部分は、いわば歌の代わりに弾いているのである。それにも関わらず、トレモロによる主旋はフレーズのけじめがまったくなく、奏者は「いかなる歌詞が歌われている部分か」という認識がまったくないようだ。これでは音楽にならない。合奏団としてのサウンドも、ただでさえベース不在で不安定なのに、マンドリンのトレモロは「キンキン」、マンドラ・テノーレとマンドセロのトレモロは「ゲロゲロ」で非常に聴き苦しかった。編曲も前奏と主題の調声が乖離しており、珍妙である。誰がこんな編曲をしたのか知りたいので、ぜひ氏名を記載してほしい。

丘の上のイノセント (c o b a／原 葉子編曲)

原曲はアコーディオンでカッコいい曲である。しかし、編曲したメンバーも、指揮者も、奏者も、なぜカッコよさが出せないのか(なぜ自分たちがマンドリン・ギター合奏で演奏するとカッコ悪くなるのか)という認識がない。曲のポイントは鋭いリズムであって、曲全体を貫くリズムは不変であることを見抜くことができれば、違った結果を出せたと思う。要するにリズムを主旋と勘違いしてメロディーとしてがなり立てたのが失敗の原因である(特に第1マンドリンがひどかった)。クラベスなどのパーカッションを入れたのも完全に逆効果で、演奏を演歌化するのを決定付けた。

マンドリン・オーケストラのための小舞曲 (ツェザール・ブレスゲン：末尾の註を参照)

前2曲の指揮者は単なる音頭取りで居ても居なくても同じであり、楽曲構築とは無縁の存在であった。それは音楽ごっこの御愛嬌として論評しないが、第1部後半の2曲はプロである堂腰慶子氏が指揮を務めるので、どれくらい違いがあるのだろうと否が応でも期待感が高まった。しかし、実際は今野さんの指揮と何も違いはなかった。はっきりいうと、この指揮者は楽曲を構築しようとしていたのではなく、演奏に合わせて「手踊り」を踊っているだけである。楽曲構築のポイントは、この作品が舞曲、すなわち、それこそ「曲に合わせて踊る音楽だ」ということで、音楽の三要素(リズム・メロディー・ハーモニー)の中ではリズムがもっとも重要である。リズムを主体に据えた楽曲であるという認識さえあれば、変化はシンコペーションで付けているということも理解できよう。しかし、例によって指揮者も奏者も「リズムをメロディーとして演奏した」のである。したがって音楽としては論評の対象外といわざるを得ない。ちなみに1曲目でマンドラ・テノーレが「ゲロゲロ」と書いたが、ハイポジションのトレモロも「ヒリヒリ」で、やはり聴いていて辛いものがあつた。

悲しみと喜び (ジュゼッペ・アネッリ)

典型的なイタリアの古典的合奏曲であり、前の曲とは違ってメロディーがもっとも重要な楽曲構築のポイントとなる。マンドリンはイタリアの民族楽器であり、イタリアはカンツォーネの国。それにも関わらず指揮の振り方はまったく変わらず、あいかわらず「ヨイヨイ踊り」を繰り返すだけであったのは、どういう訳だろうか。奏者が主旋とみるやフレーズレスでガナリ立てるのは1曲目について書いたとおりで、音量の変化もほとんど感じられないが、メロディーは符号による指定がなくとも音程に連動して音量が変化するものだし、転調による変化もある。しかし、それらを奏者に喚起するような指揮者からの指示は確認できなかった。ここまできて気付いたのだが、この団体は誰一人として曲間にチューニングを直さない。当然のことながら4曲も演奏すると調弦は相当狂ってくるが、これはメロディーを歌い上げる曲にとっては致命的であろう。マンドリン科助教授として一体何をアドヴァイスしていたのであろうか。そもそもマンドリンのハイポジションでチューニングの狂いが激しくなるのはブリッジ調整ができていないからであって、もっと楽器の構造から学び直した方がよい。

青空のポルカ (ヤロミール・ヴェイオダ／原田 甫編曲)

この程度の演奏負荷で15分間も休憩を取るのは長過ぎる。事前に調整ができていれば10分間で十分な調弦ができるし、狂ったら曲間に随時チューニングを修正するのがよいだろう。さて、第2部に入って指揮は白井純子さんに交代。この指揮者も単なる音頭取りに過ぎず楽曲構築能力はないので、指揮に関しては論評しない。演奏に関しては、ポルカというのは舞曲であって、そのステップを理解し、安定したリズムが出せなければ音楽にならないことを指摘しておきたい。スネアドラムを入れたのはよかったが、ギターと合わなくて非常に苦労していた。要するにギターもベタ弾きでリズム感が皆無だということである。同じ音形の主旋なのにマンドリンとマンドラ・テノーレ、あるいは1回目と2回目で弾き方が異なるのも理解不能。フレーズレス演奏であったのは、いうまでもない。なお、プログラムには「作曲 J. V e j v o d a & W. A. T i m m」とあるが、ウラディミール・A. ティムは訳詞者の一人で、作曲者ではない。出版譜の記載を転載したのは分かるが、もう少し曲のいわれを調べれば「もともと失恋の曲だったのが、なぜ底抜けに明るい曲に変わったのか」などといった興味も湧いて、より演奏が楽しめたと思う。

シチリアーナ (オットリーノ・レスピーギ／編曲者氏名記載なし=必ず入れよう！=)

一体、指揮者も奏者も管弦楽の原曲を聴いたことがあるのだろうか。メロディーが主体の曲だが、もっと繊細に歌っているはずで、そんなに「バリバリ」「ガリガリ」と弾くのはおかしい(特にマンドリン)。また、この演奏を聴いて、奏者がアクセント、スフォルツァ

ンド、フォルテピアノの違いを理解して弾き分けられるのか否か、疑問を持った。なお、プログラムには『リュートのための古い歌と舞曲（「古代リュートのためのアリアと舞曲」は誤訳）』を構成する曲である記載がなく、単に「リュート曲に基づく」とある。もちろん「リュート曲をモチーフに作曲された管弦楽曲をマンドリン・ギター合奏のために編曲した」というのが誤解を与えない表現である。

ハンガリー舞曲 第6番（ヨハネス・ブラームス／宮田 俊一郎編曲）

典型的なチャールダーシュ形式の曲で、ゆっくり歌い上げるラッサンと快活に動くフリシュカが交互に出てくる。したがって、両者の差を認識して弾き分けるのがポイントになるが、この指揮者は妙な部分に速度変化を設定して両者を混ぜこぜにした。西洋古典音楽というのは、ルールを守った上で表現を競うものであるが、最初から学びもしないで掟破りを犯すのは「失格、退場！」である。不勉強に眼をつぶったとしても、『青空のポルカ』と同様、同じ音形のパッセージの弾き方が毎回異なるのは理解し難いし、指揮も元気がよいだけで何をさせたいのか分からない演奏だった。

My memory（パク・ウォン／白井 純子編曲）

今回はメンバーによる編曲があるが、どうもネタ元は市販のピアノ譜のようだ。そうだとしたらピアノ譜の編者の氏名を掲げ、転用して演奏したことにすれば著作権上も問題が生じない。特に『冬のソナタ』のBGMは、作曲者が『deep sea (winter sea)』（藤原いくろう）から盗作したことを認めており、当面の間、編曲は固より演奏も控えるのが無難と思われる。演奏は、例によって曲間にチューニングをしない（できない）にもかかわらず、メロディーを主体に据えた曲を最後に演奏したため、論評の対象外であった。転調を含めたメロディーの変化が「泣かせどころ」になっているが、曲相に関わらず各パートが目一杯がなり立て、ロマンスのかけらもなかった。

オーストラリアの風景画「グンジャイア」（ロバート・シュルツ）

それにしても曲間にチューニングをまったく直さずに調弦のために15分間も休憩を取るの、いかななものかと思う。第3部の指揮は、再び堂腰慶子氏。1曲目は5つの小曲で構成される組曲というか描写曲集であるが、その第1曲「グンジャイア」は、クラベスが騒々しくて何を弾いているのか聴き取れず、論評不能。2曲目「マリーバ」は、マンドリンは「バリバリ」、マンドラ・テノーレは「ゲロゲロ」、ギターは刻みを長さ・強さとも均等に刻んで楽譜どおりには違いないもののリズムの認識がまったくないようで、けじめがない演奏であった。対位法を取り入れていてポイントが分かりにくい、それを見抜いて奏者に示すのが指揮者の役目であろう。3曲目「マラクータ」はリズムの変化が面白いが、リズムがはっきり変化しているのに指揮にはまったく変化がないのが不思議。シンコペー

ションによる味付けも捉えていない。4曲目「カトゥーンバ」は高い峰が出現する雄大さを表現していると思われるが、音量の変化もなく、ただ汚いだけ。音程が上がって転調を重ねることで曲を盛り上げているのだが、指揮者も奏者も、そうした認識はないようだ。5曲目「ジョン・グリーンの家」は、ギターがワルツのリズムを取れていない。ワルツ以外の曲もそうだが、拍子の各拍を楽譜記載どおり数学的に読み取るだけでは駄目で、強さも長さも異なるという認識が必要である。この音楽の常識がないと、たとえばワルツとマズルカとシャコンヌなどの違いは理解できず、弾き分けることもできない。ほかに5曲目で気になったのは、奏者が情感をたっぷりと歌い上げることと音量を搾り出すことを勘違いしていることだが、それは指揮者の責任に帰結する。それにしても、これだけ違う曲が並んでいるのに指揮者が繰り返す奇妙な「手踊り」が不変なのは、不気味だ。

「日本の歌三章」より 浜辺の歌 (藤掛 廣幸)

最初に書いておくが、筆者はこの作品が嫌いである。なぜなら、強引に『グランド・シャコンヌ』で受けを取ったパターンに持ち込んでおり、故・中野二郎先生の変奏曲のように原曲の美しさが活かされていないからである。指揮者の選曲センスが俗受けするパターンを好んでいるのでは致し方ないが、好き嫌いは別にして、この演奏はひどい。せめて原曲を活かした冒頭の部分だけでも歌唱曲に基づくことを徹底させ、きちんとメロディーを歌わせるべきで、そうでなければ続く変奏の部分の面白みが出せない。作曲者の意図は「聴いていたら何時の間にか原曲とは大きく懸け離れたモダンな方向に変化していた」という意外性を感じさせることにあると思うのだが、指揮者は曲の変化にもかかわらず「ヨイヨイ踊り」を繰り返すだけ、奏者は終始一貫けじめのないフレーズレス演奏を続けるだけで、終わった後「汚かった」という印象しか残らなかった。それからプログラムに「作曲成田為三 編曲藤掛廣幸」とあるが、本作品は原曲の変奏曲で、作曲者は著作権上も藤掛廣幸氏である。プロがこのようなミスを犯すようでは話にならないと指摘しておきたい。

なお、アンコールとして『日曜日は駄目よ』を演奏したが、指揮者がリズムという概念を認識も理解もできていないことが明確に証明された。バック・ビートの曲なのだが、演奏や観客に対する手拍子誘導は1拍目に強拍を置く演歌のそれを行っており、やはり音楽になっていないのである。途中から手拍子誘導を後打ちに変えたが、客席の方を向くことはなく、指揮者だけが感極まって盛り上がり、自己満足の「手踊り」を見せられるのでは、観客はたまったものではない。いずれにしても、指揮者の本分は楽曲を構築することであって、その能力がない人間は指揮に立つべきではないと思う。

本レポートの結びとして、プログラムに掲載されていた「指揮者のきままなひとりごと」と称するコメントに気になる部分があったので、触れておきたい。

『マンドリン・オーケストラのための舞曲』について、いわく「私（註：堂腰慶子氏）が10年前にドイツ演奏旅行で手に入れたこの曲を、いつか演奏してみたいと楽譜を眺めていました」…演奏旅行をしたのは母校のマンドリンクラブであって、同氏はOGなのに無理をいって同行しただけに過ぎず、当時の部員から参加に批判的な意見を耳にした記憶がある。また、5年前の演奏会で取り上げなかったのも、10年間も楽譜を眺めていながら上記のような楽曲構築しかできなかつたのも、非常に不可解である。

『オーストラリアの風景画「グンジャイア」』について、いわく「パースに在住していたことがあるメンバーと私（註：堂腰慶子氏）がオーストラリアマンドリンフェスティバルに参加の折、楽譜を購入し、この度披露することになりました」…このフェスティバルは金さえ払えば誰でも参加できるもので、筆者の所属団体にも招請状が来ていた。作品を見出したのも氏名が書かれていない「メンバー」さんの力が大きかつたのではないだろうか？なお、この楽譜は別に現地で購入しなくても、誰でも国内から取り寄せることができる。

いずれにせよ、海外旅行に毛が生えた程度の履歴でプロとしては評価に値せず、事情に詳しいアマチュアからみても非常に胡散臭い記述である。どうしてもよいことを仰々しく書かなくとも、演奏結果が全てを語る。

問題にしたいのは、なぜ、このようなことを書くのかであるが、「昔から中味がない人間ほど肩書を欲しがる」といったら過言だろうか。

ギリシア神話に登場するカシオペアは、己の美を誇って海の神ポセイドンの怒りを買ひ、罰として娘のアンドロメダを生贄に捧げなければならなくなつた「傲慢の女王」であつた。団体名を考えると象徴的であるが、「きままなコンサート」というより「指揮者のわがままコンサート」の名称を奉りたい（2006.6.24.13:30～、於：札幌コンサートホール「K i t a r a」小ホール）。

註：プログラムには「マンドリン・オーケストラのための舞曲」とあつたが、不適訳と判断されるので、本レポートでは用いなかつた。